

大学の現在、コロナ禍のなかで考える

特別ゲスト 佐藤郁哉氏（同志社大学教授）

吉見俊哉や佐藤郁哉がいかなるディシプリンから語るにせよ、私は「文学／大学」論の視点から発言するでしょう。大学で働いている者は、みずからの知見にもとづいて大学について語る事ができるし、できねばなりません。そこに議論が成立するには、相手の意見をよく聴き、論理の矛盾を衝いてゆくことが必要なのは言うまでもありませんが、場合によっては言っぱなしでもよいのです。オンラインの研究会において、そうした自由な言論が可能かどうかを探ります。問いは、この春に日本の大学でいったい何が起きたのか、この秋から日本の大学はどのような状況に陥るのか、われわれはそれにどのように対応すべきか、というものです。

安倍首相（当時）は3月初めにすべての学校を休校にしましたが、大学にはそれを強要しませんでした。4月になると有力な大学のほとんどは、自主的にオンラインによる授業を始めています。新学期の開始を秋にずらしてはどうかという意見もありましたが、文科省は動かなかったし、東大などではすでにオンラインへの移行のための基盤の整備が終わっていたようでした。変化にとまどった大学は、「淘汰」されないために必死でがんばるしかありませんでした。しかしこの急激なオンラインへの移行は、さまざまな問題を引き起こしています。しよよせは、パソコン操作にうとい教職員、本務校をもたない非常勤講師、大学のある都市にやってきて友達もできないままはしごを外されてしまった新入生に顕著でした。

この秋からのハイブリッドの授業はうまくいくのでしょうか。大学のキャンパスに来ている学生は、オンラインの授業に参加するときどこにいればよいのでしょうか。教師から問われたときに声を出して応えるためには、彼らのための個室が必要なのではないのでしょうか（それとも質問にはチャットで答え、自分の顔はネットの容量の問題もあるのであいかわらず出さなくともよいとでも？）図書館では、かろうじて本は借りられるようになって、本や雑誌を閲覧するための椅子が使えないままです。

それにしても、オンラインの情報はどこに保存され、だれによって管理されるのでしょうか。インターネットは「ソーシャル・ディスタンス」を保つにはよいかもしれませんが、GAFAMのような世界企業はうらで何をしているのかわかりません。自らの利益を上げるにつながらるウィルスの蔓延を、彼らが自ら抑えようとする事はないでしょう。中国とアメリカは、いまや知的財産やデータをめぐる戦争を始めています。その勝者によって世界の大学が

支配されてよいのでしょうか。そこにウィルスの思考の蔓延の危機はないのでしょうか。デジタル・ディバイドは反知性主義を育まないのでしょうか。知の支配と知の民主化のあいだでとりかえしのつかぬことが起ころうとしています。この研究会では、それが何かを問うことになるでしょう。多くみなさんの参加を期待します。

この春からの大学の状況について、当学会の国立大学、公立大学、私立大学の教員がそれぞれ10分ほど話します。つぎに佐藤郁哉氏にそれを受けて、あるいはご自由に、20分ほど話していただきます。そのあとは参加者に開いて、先生への質問や、自らの意見を語ってもらうということにしたいと思います。司会は西垣順子（当学会事務局長、大阪市立大学）が担当します。

大学評価学会共同代表 岡山茂

参加を希望される方は前日までにお申し込みください。追って、ミーティングアドレス等をご連絡します。

申込・連絡先：西垣順子（大阪市立大学） nishigaki@rdhe.osaka-cu.ac.jp

当日の緊急連絡先：光本滋（北海道大学） mitumoto@edu.hokudai.ac.jp

電話：090-9751-3400